

小説の 読み は一つじゃない 文学の世界を楽しむ方法

三川 智 央

0 . 何に(どう)見えますか？

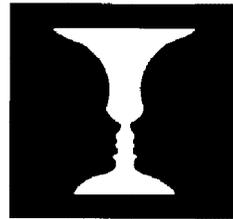


図 1

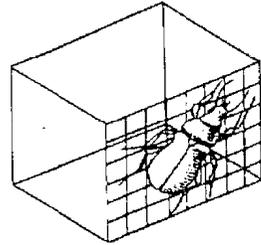


図 2

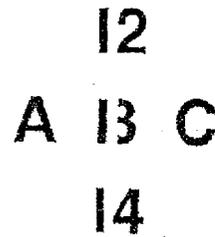


図 3



図 4

・小説を 読む ってどういうこと？

「小説を 読む ということは、最終的には作者の意識を明らかにすることである」という考え方は、長く近代文学研究を支配し続け、学校での国語教育を通して私たちの中に根深く広がった。

しかし、その固定観念を崩すような動きが、1980年代後半から1990年代にかけて日本の近代文学研究の分野で急速に進展した。

作者というのは、おそらくわれわれの社会によって生みだされた近代の登場人物である。(中略) 語るのは言語活動(ことば)であって作者ではない。(中略) 一編のテキストは、いくつもの文化からやってくる多元的なエクリチュールによって構成され、これらのエクリチュールは、互いに対話をおこない、他をパロディー化し、異議をととなえあう。しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、これまで述べてきたように、作者ではなく、読者である。(中略) テキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある。(R・バルト「作者の死」 原文1968年発表)

ならば、読者が自由勝手に小説を 読む ことができるかという、それも誤った考え方である。そもそも、実際に小説を 読む 場合、その行為はさまざまな文化的コードに縛られている。

紙の上にインクで印刷された小さなシミの繋がり

文字として理解 = 紙の上の文字の羅列

何らかの表象としてイメージし、小説として 読む

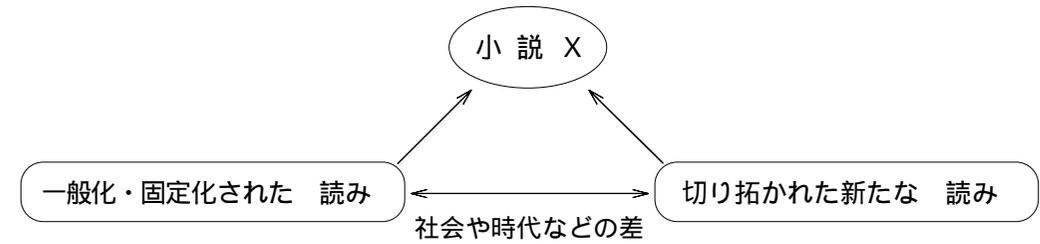
文化的コード = 社会や時代など

読む という行為は、社会や時代を含めて読者が置かれている環境や文化に常に束縛されながら初めて可能となる。

・小説を 読む ことのおもしろさ

読者の状況(社会や時代など)が異なれば、同じ小説であっても違う 読み が生み出される可能性がある。 0 - 図 1 ~ 4

一般的に流通し固定化された 読み に縛られることなく、小説のことばと自分の感性を率直に関わらせていくことで新たな 読み が切り拓かれ、もしそれが多くの人に受け入れられれば、時代的・社会的な 読み として定着していく。



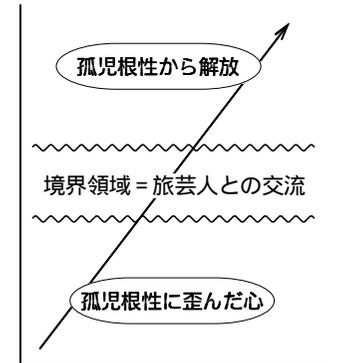
・具体例その1 ~ 『伊豆の踊子』は純情小説か？ ~

一般的に流通している 読み

二十歳の旧制高校生である主人公が孤独に悩み、伊豆へのひとり旅に出かけるが、途中旅芸人の一団と出会い、一行中の踊子に心を惹かれてゆく。人生の汚濁から逃れようとする青春の潔癖な感傷は、清純無垢な踊子への想いをつのらせ、孤児根性で歪んだ主人公の心をあたたかときほぐしてゆく。雪溶けのような清冽な抒情が漂う美しい青春の譜である。

(新潮文庫『伊豆の踊子』カバー)

孤児根性にゆがんだ自分を反省するため伊豆の旅に出た一高生の「私」は、旅芸人一行と天城から下田まで道連れになる。その中の清純な踊子に心ひかれた「私」は、彼女から「いい人ね」と言われ、素直に有り難く思う。踊子と別れて下田から船に乗った「私」は、踊子の好意によって孤児根性から解放され、救われた思いで涙を流す。(東京書籍『新総合図説国語』)



境界線突破型の物語としての 読み

『伊豆の踊子』(第5章)

私と栄吉とは絶えず五六間先きを歩いていた。 / 「それは、抜いて金歯を入れさえすればなんでもないわ」と、踊子の声かふと私の耳にはいったので振り返ってみると、踊子は千代子と並んで歩き、おふくろと百合子とがそれに少し後れていた。私の振り返ったのを気づかないらしく千代子が言った。 / 「それはそう。そう知らせてあげたらどう」 / 私の噂らしい。千代子が私の歯並びの悪いことを言ったので、踊子が金歯を持ち出したのだらう。顔の話らしいが、それが苦にもならないし、聞耳を立てる気にもならない程に、私は親しい気持ちになっているのだった。暫く低い声が続いてから踊子の言うのが聞えた。 / 「いい人ね」 / 「それはそう、いい人らしい」 / 「ほんとにいい人ね。いい人はいいね」 / この物言いは単純で開けっ放しな響きを持っていた。感情の傾きをぼいと幼く投げ出して見せた声だった。私自身にも自分をいい人だと素直に感じる事が出来た。晴れ晴れと眼を上げて明るい山々を眺めた。瞼の裏が微かに痛んだ。二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった。

一般的な 読み への疑問

・名前で描かれることのない「踊子」

「私」が踊子と心からの交流を持ったならば、「踊子」ではなく一人の人間「薫」(踊子の名前)として描かれるのが普通ではないのか。

- ・「孤児根性」は重要なのか？

「孤児根性」の克服が重要な割には、「孤児根性」ということばが小説の中に登場するのは第5章になってからたったの一度だけ。

- ・あっさり旅芸人との別れを決める「私」

旅芸人たちとの家族的な交流のお陰で孤児根性で歪んだ心が解きほぐされたはずなのに、「私」は意外にあっさり旅芸人たちとの別れを決めている。

『伊豆の踊子』(第6章)

「これで明日の法事に花でも買って供えて下さい」/そう言って僅かばかりの包金を栄吉に持たせて帰した。私は明日の朝の船で東京に帰らなければならないのだった。旅費がもうなくなっているのだ。学校の都合があると言ったので芸人達も強いて止めることは出来なかった。(中略)明日が赤坊の四十九日だから、せめてもう一日だけ出立を延ばしてくれと、またしても皆が言ったが、私は学校を楯に取って承知しなかった。

新たな 読み によって作られるもう一つの物語

- ・「旅情」(=非日常的な世界に生きる踊子への欲望)からスタートした旅

『伊豆の踊子』(第1章)

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。(中略)私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。(中略)あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できっと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でぴったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。(中略)小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて来た。(中略)踊子たちが傍にいとなくなくなると、却って私の空想は解き放たれたように生き生きと踊り始めた。彼等を送り出して来た婆さんに聞いた。/「あの芸人は今夜どこで泊まるんでしょう」/「あんな者、どこで泊るやら分るものがございますか、旦那様。お客があればあり次第どこにだって泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか」/甚だしい軽蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思った程私を煽り立てた。

『伊豆の踊子』(第2章)

芸人達は木賃宿と向い合った料理屋のお座敷に呼ばれているのだと分った。二三人の女の声と三四人の男の声とが聞き分けられた。(中略)やがて、皆が追っかけっこをしているのか、踊り廻っているのか、乱れた足音が暫く続いた。そして、ぴたと静まり返ってしまった。私は眼を光らせた。この静けさが何であるかを闇を通して見ようとした。踊子の今夜が汚れるのであるうかと悩ましかった。

- ・旅芸人たちが日常を生きる家族集団であることを知った「私」

『伊豆の踊子』(第2章)

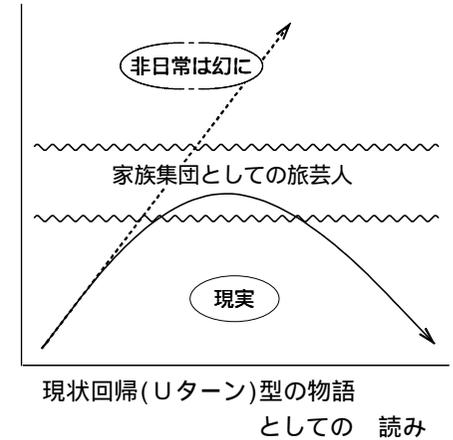
そこの内湯につかっていると、後から男がはいって来た。自分が二十四になることや、女房が二度とも流産と早産とで子供を死なせたことなどを話した。彼は長岡温泉の印半纏を着ているので、長岡の人間だと私は思っていたのだった。また顔付も話振りも相当知識的なところから、物好きか芸人の娘に惚れたか、荷物を持ってやりながらついて来ているのだと想像していた。

『伊豆の踊子』(第4章)

「私はあなたが長岡温泉の人だとばかり思っていましたよ」/「そうでしたか。あの上の娘が女房ですよ。あなたより一つ下、十九でしてね。旅の空で二度目の子供を早産しちまって、子供は一週間ほどして息が絶えるし、女房はまだ体がしっかりしていないんです。あの婆さんは女房の実のあふくなんです。踊子は私の実の妹ですが」/それから、自分が栄吉、女房が千代子、妹が薫ということなどを教えてくれた。

- ・旅芸人たちから離れて行こうとする「私」
 - 『伊豆の踊子』(第6章)引用部分

2つの 読み のどちらが正しいというのではなく、(おそらく作者も意識していないまま)『伊豆の踊子』自体が、異なる2つの 読み を容認せざるをえない小説の構造を持ってしまっている。



- ・具体例その2 ~ 『こころ』はホモ小説か? ~

『こころ』の全体像

- ・「上 先生と私」
 - 学生「私」は鎌倉の海水浴場で出会った「先生」に心ひかれ、帰京後も「先生」の自宅を訪れるようになる。「先生」は大学を卒業しているのに仕事を持たず、美しい奥さん(静)と二人で暮らしており、「恋は罪悪ですよ」といった謎めいたことばを口にする。
- ・「中 両親と私」
 - 帰郷した「私」は病気の父に付き添う。明治天皇崩御の直後に「先生」から分厚い手紙が届くが、それが「先生」の遺書だと知った「私」は危篤の父を残したまま東京へ向かう。
- ・「下 先生と遺書」
 - 遺書の中で「先生」自身が自分の過去について「私」に打ちあける。大学時代の「先生」は同居していた親友のKを裏切って下宿のお嬢さん(静)との結婚を決めたが、Kは自殺してしまう。「先生」は罪悪感に苦しみ続けながらも、それを誰にも話さないでいたのだ。

ホモソーシャルな世界を意識した 読み

『こころ』(第3回)

次の日私は先生の後に続いて海へ飛び込んだ。そうして先生と一所の方角に泳いで行った。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返って私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いているものは、その近所に私等二人より外になかった。(中略)私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂った。先生は又ばかりと手足の運動を已めて仰向になったまま浪の上に寝た。私もその真似をした。(中略)私はこれから先生と懇意になった。

「私」と「先生」の出会いは、この小説の中の世界がホモソーシャル(=同性社会的)であることを暗示している。そして、「先生」とK、お嬢さんの関係もそうしたホモソーシャルな世界の中で進行していたとすると、読者は『こころ』に対してそれまでとは異なる別の 読み を強いられる。なぜなら、ホモソーシャルな世界では男女間に「恋愛」は成立しない(できない)からだ。

- ・Kと先生は、なぜ自殺しなければならなかったのか？
- ・先生はなぜ奥さんに過去を打ちあけず、「私」にだけ打ちあけたのか？
- ・先生の遺書の最後に「(私の過去は)あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまって置いて下さい」と書いてあったにもかかわらず、「私」は「筆を執って」この「こころ」という手記を執筆している。それはどのようなことを暗示しているのか？